

## Konrad Bollstatterの「占い本」について

藤井明彦

Konrad Bollstatter (1420年代生～1482/83年没) はアウクスブルクで筆耕を生業としていた人物だが、注文に応じて写本を制作するばかりでなく、自分の蔵書に加えるために筆写をしたり、そこに自らの創案を書き加えて独自の版を作ったりすることもあった。バイエルン州立図書館所蔵の写本Cgm312 (全177葉) もそのようなものの一つだが、主な内容は1450年代から1470年代にかけてBollstatterが書き溜めた10種類の「占い本」である。本発表ではそのなかで構成が最も入念な「驚異の占い本Seltzsams loßbüch」を取り上げた。この占いでは、まず、結婚すべきかどうか、病人が健康に戻るかどうか、旅行中の者が帰って来るかどうかといった16の「項目(問い)」から一つを選び、二つのサイコロを振る。写本には12の扇形に区切られた12枚の円盤が描かれていて、二つのサイコロの目を足した数(2から10まで、11, 12が出た場合は振り直し)によってどの円盤のどの扇形を見るべきかが決まる。そこに記されているのは「～王の～行目に行け」という指示で、王はフランス王、シチリア王、ロシア王、バビロニア王などの16人、指示される行数はサイコロの目と同じ数字になっている。その王が答えを与えて占いが終了することもあれば、「～に尋ねよ」という指示が出されることもある。行く先はユダヤ民族の太祖・異教の師・福音史家・教父・隠修士・司教・世俗の諸侯・伯爵・聖杯騎士・円卓騎士・異邦人・勇士・情夫(それぞれ四人)、四大・風・森(山地)(それぞれ四種)だが、こうして答えに行き着くまでの段階が一つ増えることによって手続きが適度に複雑になり、占いの娯楽性と信憑性が高められる印象がある。サイコロの数字や王による吉凶の偏りもなく、答えが簡単に予想できないという点では優れた占いと言える。

本発表では、占いの答えを与える権威的存在に特に注目した。「～王の～行目に行け」という指示を出す役を1枚目の円盤ではシナイ山、オリーブ山などの12の山が、2枚目の円盤ではハイタカ、ハヤブサなどの12種の鳥が務めている。以下、それぞれ12の動物、(植物の)根、草本、魚、宝石、使徒、木本、預言者、河、都市と続く。これに王と上記の太祖～森(山地)を加えた総計29の存在の分類を試みた。全体は大きく「人間界」と「自然界」に分かれ、「人間界」はさらに「俗界」(王、世俗の諸侯、伯爵、聖杯騎士、円卓騎士、勇士、情夫)、「聖界」(使徒、預言者、太祖、福音史家、教父、隠修士、司教)、「ギリシャ・ローマ」(異教の師、異邦人)に、「自然界」は「存在するもの」(鳥、動物、魚、根、草本、木本、宝石)と「存在する場所」(山、河、都市、四大、風、森)に分けられる。他の占いによく登場する惑星も黄道十二宮もキリストも聖母も天使も現れず、全体として現世的・地上的な枠組みが網羅されている印象がある。